

Courrier de Séverac

セヴラック通信



第6号

2009
前期

日本セヴラック協会・会報

Société Déodat de Séverac - JAPON



2009年6月20日(土)
代官山エナスタジオ

《例会》

15:00-16:40

【演奏】

フルート六重奏

植村泰一 (1st Flute)、日比野久美子 (2nd Flute)、五百川伸子 (3rd Flute)、
西村 祐 (Alto Flute)、吉野裕子 (Alto Flute)、石川絵津子 (Bass Flute)

セヴラック (編曲: 石川絵津子): 《休暇の日々から》第1集より

〈ロマンティックなワルツ〉

Déodat de Séverac ; Valse Romantique

平原あゆみ (Pf)

石田一郎: 組曲《北国》より

〈夜の船着き場〉

〈吹雪の夜〉

～休憩～

【演奏とお話】

末吉保雄

セヴラック: 歌劇《風車の心》について～初演百年の年に

鎌田直純 (Bar) ・ 末吉保雄 (Pf)

セヴラック: オーバード (朝の歌) —— マルグリット・ナヴァール 詩
Aubade (Marguerite Navarre)

セヴラック: オフランド (捧げもの) —— 18世紀の詩
Offlande (Traditionell)

セヴラック: ジャックの唄—— 歌劇《風車の心》第1幕より 〈民謡風の唄〉
Chanson de Jacques —— Extrait de "Le coeur du Moulin" 1. Acte Poème de M. Magare

【演奏】

館野 泉 (Pf)

林光: 《花の図鑑・前奏曲集》

〈ヒメエゾコザクラ〉

〈イヌタデ〉

〈イヌノフグリ (イヌフグリ)〉

〈サンザシ〉

〈ハス〉

〈ツリフネソウ (ていんさぐぬ花)〉

〈フキ〉

〈ノイバラ (うばら)〉

《懇親会》

17:00～

セヴラック通信

Courrier de Séverac

第6号

2009
前期

目次

〈連載〉セヴラックを伝えた日本語文献 その3

『音楽新潮』と柿沼太郎●末永理恵子（文）————— 03

セヴェラックの作品に就て●T. K.（文）————— 05

〈連載〉セヴラックと私●柴田妙子————— 08

第11回例会の報告●亀田正俊————— 10

第12回例会プログラム 01

NEWS 11

編集後記 11

連 載
セヴラックを伝えた日本語文献
その3

私たちのセヴラックが日本でどのように紹介されてきたか、文献から探る試みの第3回は、前号に続き音楽雑誌『音楽新潮』1936年2月号の「セヴェラック（セヴラック）」に関する記事から、後半部分を収録します。まず、文章に入る前に、この『音楽新潮』とはどのような雑誌であったか、執筆者は誰だったのかについて、日本セヴラック協会会員の末永理恵子さんに、解説を書いて頂きました。

『音楽新潮』と柿沼太郎

文：末永理恵子

原典

前号『セヴラック通信第5号』で掲載された文章「デオダ・ド・セヴェラック 現代佛蘭西の農村作曲家」は、訳者は出典を記していませんが、アメリカの音楽雑誌 *The Musical Quarterly* の第20巻第2号(1934.4)、206～212頁に掲載された論文(Theodore Baker 英訳)と見られます。*The Musical Quarterly* は、1915年創刊で、アメリカに限らずヨーロッパの研究者の論文も多く掲載している学術雑誌です。

『音楽新潮』

この論文の邦訳が掲載された『音楽新潮』は、関東大震災翌年の大正13年(1924)2月、銀座の十字屋楽器店内の音楽新潮発行所より創刊された月刊誌です。同時代の音楽、特にフランス、イタリア、ロシア音楽に多くの頁を割くというユニークな編集方針をとっていました。当時の“現代音楽”を紹介し、外国の論文の訳を載せ、海外の音楽情報も盛り込むなど、画期的な内容の雑誌でした。1930年代からはレコードの紹介も積極的に行われ、また、西洋人による楽曲のみならず国内の創作にも目を向けて、清瀬保二、松平頼則、箕作秋吉、石井五郎、荻原利次、石田一郎、早坂文雄、江文也などによる作品が掲載されるようになります。読者をリードする姿勢は、誌面作りだけでなく演奏会の主催にまで発展しています。

このような魅力あふれる雑誌が作られたのは、終刊までの18年間主幹をつとめた柿沼太郎(1889-1967)に負うところが大きかったと考えられます。柿沼は早稲田大学文学部英文科を卒業し、東京音楽院で天谷秀に師事、音楽史研究や評論、啓蒙書の執筆などで活躍しました。

訳者 T.K. とは

さて、前号で投げかけられた「『T.K.』は、いったい誰なのでしょう」という問について。このイニシャルと『音楽新潮』の中での役回りから見て、おそらく柿沼太郎であろうと判断されます。『音楽新潮』は前述の通り、柿沼が主幹をつとめており、自ら翻訳した記事をいくつも発表しています。また、柿沼がランドルミーの『西洋音楽史』(L'histoire de la musique)を翻訳しているのは、前号で亀田さんが書かれた通りですが、実は下記のように3回も出版しており、いかに熱心に紹介につとめたかがわかります。当時の現代音楽までを含めて概観されており、セヴラックについても少し触れられた書です。

1. 大正 15 年 (1926) 十字屋楽器店

柿沼は翻訳にあたって、「訳者の仏蘭西語は目下、この著を直接原文から譯出するところまで進んでみないので、主にマルテンス氏の英譯に據つた。他日原著に據つて訂正する機会を得たいと願つてゐる」と述べています。原著は F.H.Martens が英訳し、最新の情報をも付け加えた History of Music (1923) と思われます。

2. 昭和 16 年 (1941) 古賀書店

志を実現した、「直接仏蘭西の原著よりする邦譯」版。「舊版譯稿は悉く棄て」訳し直し。

3. 昭和 28 年 (1953) 音楽之友社

音楽文庫の上下 2 巻。上記 2 に基づき、訂正を加えた版。

こだわり続けている執筆者による論文だったのも、注目の要因かもしれません。いずれにせよ、セヴラックに関する貴重な論文が同人たちの目に触れていたというのは、興味深いところでは。

*このほかに『音楽新潮』に掲載されたセヴラックの記事

1928.10 (5 巻 10 号) 口絵「デオダ・ドウ・セエ^o ラック」、藤木義輔「デオダ・ドウ・セエ^o ラック」

1933.5 (10 巻 5 号) 口絵「デオダ・ド・セヴェラック」、石田一郎「セヴェラック・モーツァルト」(レコード評)

*参考文献

日本近代音楽館編『日本の音楽雑誌解題集 1』(1999)

後藤暢子、川添圭子、神月朋子編著『昭和初期の音楽評論：音楽批評の萌芽・記事索引』(山田耕筰研究所、2001)

セヴェラックの作品に就て

T・K 生

ランドルミイ氏の簡潔にして要を盡した紹介〔編註:『セヴェラック通信第5号』08ページに収録〕は、讀者諸君の間にセヴェラックの人及び藝術に對する興味を喚起することだらうと思はれる。まことにセヴェラックは近代佛蘭西の作曲界に異彩を放つユニークな存在であつたから。

セヴェラックの生涯に就てはランドルミイ氏も擧げて居られるブランシュ・セルヴァ女史の「デオダ・ド・セヴェラック」(巴里、ドラグラーフ出版)が今のところ唯一の著書で、四六版百餘頁のパンフレットではあるが、そこに陳べられた素材は今後のセヴェラックの研究者に益するところ多大である。女史はセヴェラックの生涯を通じての親しい友であつた上に、セヴェラックの演奏者として權威的なピアニストである。(それにつけても女史がコロムビアにレコードしたセヴェラックの三曲が會社の無理解に會つて絶盤に葬られたのは何んとしても惜しいことである)

セヴェラックの作品はセルヴァ女史の調査に據ると三百曲近くなつてゐる。が出版を見たのは約百曲あまり。しかし今後も出版の見込があるから樂觀していいやうである。ここには将来のセヴェラック・ファン諸君——セヴェラックは我が國にもファンを作るに相違ない——の為に、既出版を見た作品の中から重要なもののみを擧げるにとどめる。詳しくはセルヴァ女史の著書の最後を飾る美事なまた入念な作品表に就て見られたい。

「地の唄」—— Le Chant de la Terre

六部から成る農事詩(ポエーム・デュオルヂック)ピアノ曲。一九〇一年作。同二年三月ジャン・デュ・シヤスタン初演。(ブリュツセル)三年一月セルヴァ巴里初演。プロローグ(地の魂)——労働——種蒔き——間奏曲(夜番の話)——電——刈入れ——エピローグ(結婚の日)

「ホ調組曲」—— Suite en mi

一九〇一年作。オルガン曲。同二年三月ゾルヂユ・イボ初演。序曲——コラルと變奏曲——田園ファンタジイ——フーグの四曲から成る。

「夢」—— Un Rêve

エドガア・ポオ(マラルメ譯)の詩につけた歌曲。ピアノ伴奏。同二年作。五年五月ゾルヂユ・マルティエ夫人初演。

「山の夜明け」—— A l'aube dan la Montaigne

歌とピアノ。デオダ・ド・セヴェラック詩。一九〇三年作。同年ブリュツセルにてジャンヌ・ウィリック初演。

「粉屋の心」—— Le Coeur du Moulin

二幕の抒情詩。一九〇三年作。歌、合唱及び管絃樂。臺詩はモオリス・マアグル作。同九年巴里のオペラ・コミック座初演。十八世紀末のラングドックの村をバックとした歌劇である。

「ラングドックにて」—— En Languedoc

五曲から成るピアノ組曲。一九〇四年完成。翌年五月スコラカントルムにてヴィニェス初演。(全曲)「お祭りの農家」——「池にて、夕暮」——「牧場の馬」——「春の墓地の一隅」——「市の日、農家へ」

「鉛の兵隊」—— Le Soldat de Plomb

三つの話から成る事実談。ピアノ四手。一九〇五年作。同年五月スコラ・カントルムにてセルヴァとその弟子に依つて初演。

「十八世紀のシャンソン十曲」—— 10 Chansons du XVIII^e siècle

歌とピアノ。一九〇五年作。十八世紀の佛蘭西民謡集。

「十八世紀のシャンソン九曲」—— 9 Chansons du XVIII^e siècle

同前。第二集として出版。

「佛蘭西の古いシャンソン十曲」—— 10 Vieilles Chanson de France

表題の如く佛蘭西の古い民謡集。セヴェラックがこれに伴奏をつけた。一九〇五年作。前の二集と同様十八世紀の民謡である。

「浪漫的な歌曲」—— Lied Romantique

チェロとピアノ。一九〇七年作。

「太陽と浴みする女達」—— Baigneurs au Soeil

ピアノ曲。「バニュール・シュル・メルの思ひ出」とある。一九〇八年作。翌年三月ブリュツセルにてセルヴァ女史初演。

「葡萄棚と臺との踊」—— Danses des Treilles et du Chevalet

バレエ。オーケストラ曲。一九〇八年作。同十一年五月巴里の國民音楽協會にて初演。

「エリオガバアル」—— Heliogabale

三幕の抒情悲劇。舞臺音楽。獨唱、合唱及びオーケストラ。エミール・シカアル臺詩。一九一〇年作。同年ベヅィエ市のアレーヌ座にて初演。

「アドニスの復活」—— La Resurrection d'Adonis

バレエ・ミモドラム。シナリオはガブリエル・ボアシィの作。一九一〇年作。オーケストラ。同年八月ベヅィエ市のアレーヌ座にて初演。

「セルダニア」—— Cerdana

五曲より成るピアノ組曲。一九一一年完成。同年四月ブリュツセルにてセルヴァ夫人初演。繪畫のエチュードとある。「セルダニユに到着」(小帆前船にて)——「お祭り」(ピュイセルダの思ひ出)——「田舎廻りのヴィオロン奏きと落穂拾い」(フォル・レムウ巡礼の思ひ出)——「リヴィアの基督の御前の驢馬曳き」——「驢馬曳きの歸還」

「フロール・ドシタニア」—— Flors d'Occitania

ラングドック方言で書かれた三つのメロディー。歌とピアノ。一九一三年作。

「休暇に」—— En Vacances

七曲から成るピアノ曲集。子供用にと書かれた。「城にて、及び公園内にて」と註がついてゐる。「祖母の愛撫」——「訪ねて来た小隣人」——「教會の瑞西人に假装したトート」——「侯爵夫人の假装したミミ」——「公園のロンド」——「古い音楽箱を聞くところ」

——「浪漫的なワルツ」

「スパルタのエレーヌ」—— Héléne de Sparta

ヴェルハアレンの詩に據る舞臺音樂、オーケストラと聲のオーケストラ。一九一二年作。同年五月巴里のシャトレエ座にて初演。

「スコラ風の小組曲」—— Petite Suite Scholastique

オルガン曲集。一九一三年出版。序曲（一名、入場）——瞑想（一名、奉獻歌）——祈祷=コラール（一名、祈祷歌）——メランコリックな歌（一名、聖體拝受）

「私の可愛いお人形」—— Ma Poupée chérie

歌とピアノ。子守唄。セヴェラック詩。一九一四年一月作。

「ロオリエ・ロオズを戴いて」—— Sous le Lauriers Roses

「愛する大家シャブリエ、ボルド及びアルベニースの思ひ出に捧ぐるファンタジイ」とある。ピアノ曲。一九一九年作。翌年一月巴里の國民音樂協會にてセルヴァ女史初演。

以上挙げた作品は巴里のルアル・ルロル、スコラ・カントルム、マックス・エシツグ、ジョベェルなどから出版されてゐる。尚歌曲を少しく加へると、モオリス・マーグルの一幕の劇につけた「シャンソン・ド・ブレエジーヌ」メエテルリンクの「誠意のない人」ポオル・レエの詩につけた「角笛」（以上マックス・エシツグ出版）はいづれも初期の作品であるが特色的である。

最後に私はジャン・オーブリのセヴェラック論から次の一節を引用したい。「彼はアルベニースが西班牙の為に、マヌエル・デ・ファリアがアンダルシアの為にしたと同じ高度の力を以て彼の故郷を音樂的に描くに成功した。ヴァンサン・ダンディーのセルヴァンヌ、ドビュッシイのイール・ド・フランス、ボルドのバスクの國、ラドミロオのブリタニイ、ラヴェルの作品の多くを覗く佛蘭西と西班牙の國境などは、「地の唄」「ラングドックにて」「セルダニア」の如きピアノ曲集や「粉屋の心」のやうなオペラに現はれるセヴェラックのラングドックほどには主體的でない。しかも彼はこれを果たしながら、音樂上の地方根性なるものの平凡な限界にとどまることを決してしなかつた。彼はラングドックを佛蘭西音樂の一部とした、丁度メリメエが「コロムバ」に於てコルシカ島を佛蘭西文學の一部としたやうに」

附記——セヴェラックのレコードはまことに少い。日本コロムビアからブランシュ・セルヴァ演奏の「三つのピアノ曲」として「ラングドックにて」中の「お祭りの農家へ」と「セルダニア」の一曲「リヴィアの基督の御前の驢馬曳き」それに大曲「陽光を浴びる女達」が十二吋三枚（八〇九九——八一〇一）出てゐたが、昨年カタログで見ると廃盤にでもしてのだらう抹殺されてゐる。心無き仕業である。是非復活させたいものだ。現在出てゐるのは歌曲「オーバード」と「私の可愛いお人形」の二曲（クレエル・クロアザ獨唱。五二五三）だけだが、どちらも愛誦すべき小品、「特に私の可愛いお人形」は傑作である。



セヴラックと私 柴田妙子

館野先生がセヴラックの楽譜を海外から取り寄せて手になさったのは19歳の時、それからずっとセヴラックの曲を愛し、ご自身のレコーディングを始められてからは、機会あるごとにセヴラックの録音をレコード会社に提案し続けてこられたそうだが、どこの会社も、知らない人のものは作っても売れないから、という理由で実現されなかった。それならもう自分で作るしかないと準備をすすめていらしたところに、ワーナークラシックスがCDの制作と販売を申し出てくれたそうだ。私はそれ等のいきさつを何かのお席で伺っていたので、館野先生はどんなにお嬉しかったことかと想像に余りあるようだった。

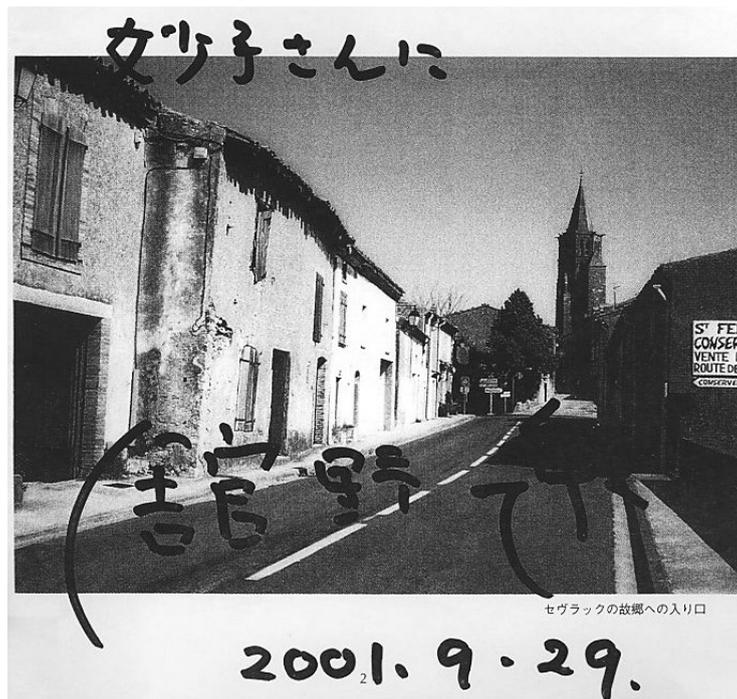
しかし、そこまでお好きで執着なさるセヴラックの音楽とはどんな響きなのだろう。私はCDのでき上がる日が待たれてならなかった。

それは確か館野先生の演奏生活40周年の記念リサイタルに合わせて発売されたのだと思う。CDのライナーノートにさせていただいたサインは、「館野泉 2001.9.29」となっているし、文字はお気持ちさながら躍っているように見える。

そのCDを初めて聴いた日のことは今でもよく覚えているが、とても緊張して音が鳴りだすのを待っていた。出だしは静かで少し寂しい印象を受けたが、曲が進むにつれて、広々とした大地とそこで営まれる農作業の様子が次々絵になって頭に浮かび、ゆったりした気分になったり、またある時はひとりででに身体が弾んでしまう快活ささえも覚えた。それは、セヴラックの日常生活から自然に生まれた素朴さや温かさが大地の中で静かに響いているような、今迄聴いてきた音楽とは別の味わいのものであった。

ああ、館野先生が長い間心の中で大切にしておられたセヴラックの音楽とはこういう音楽だったのか！ 私は2枚のCDを聴き終えた時、まだセヴラックの世界のほんの入口をのぞいただけに過ぎなかったけれど、自分もこの音楽が好きだと感じたことをとても嬉しく思った。

その後、セヴラック協会が設立された時は早速入れていただいて今日に至っているが、年2回行なわれる例会ではセヴラックに関するお話や、ピアノ、フルート、声楽の演奏まであって、私にとっては豊かな学びの時間、そしてその後の親睦会では、



事務局の方々が用意して下さったおいしいワインとたくさんのおつまみに舌鼓をうちながら、会員同士自由に語り合うことができ、この一時がまた楽しくてたまらない。

館野先生の長い思いが叶われたCDのお陰で、私は70歳の声をきいてからセヴラックに出会わせていただくことができた。生きていて良かった！ としみじみ思う此の頃である。

第11回例会の報告

亀田正俊

日本セヴラック協会の第11回の例会は、いつものエナスタジオで行われました。事前申込が少なめで、集まりが少々心配でしたが、当日は満席。会員の皆さんが例会をいかに楽しみにしていたださるかがよくわかります。

第11回例会のテーマは「石田一郎」。今年2009年が生誕100年にあたり、この時点ではちょっとだけ早い記念イベントでした。セヴラックをこよなく愛した石田一郎氏は、「音の感覚の面」でセヴラックの影響を受けたそうです。館野泉先生や濱田滋郎先生は石田氏と親しく交わり、また植村泰一先生も石田氏の「祭りの笛」などを演奏されているので、セヴラック協会とご縁のある作曲家です。この日は、会報に掲載された石田氏へのインタビュー（1977年）を資料として、館野先生や植村先生に思い出を語っていただき、その後、平原あゆみさんの演奏で《夜の船着き場》と《黄昏の林檎畑》を聴きました。「日本セヴラック」とも評されるその暖かい響きに、作品の心象風景が目には浮かぶようです。もっと多くの作品を聴きたいので、今後も例会で演奏されていくようにしたいものです。

さて、恒例となっているフルート六重奏は、この日は〈古いオルゴールが聴こえる時〉。石川絵津子さん編曲による《休暇の日々》シリーズは残すところ1曲です。原曲のピアノ的な響きが思いがけない仕掛けによって、色彩豊かな音楽に生まれ変わっていました。フルートによるアンサンブルならでは面白さを感じました。

鎌田直純先生と末吉保雄先生による演奏は「ボードレールの詩による歌曲」がテーマでした。セヴラックの《梟》とデュパルクの《旅への誘い》が演奏されましたが、同じ詩人に曲をつけながら、音楽の方向は異なっています。《梟》はこれまでも聴くたびに深みへ吸い込まれるような気分になるのですが、この日は特に、鎌田さんの美声によるデュパルクがじつに魅惑的で、すっかり魅せられてしまいました。

この日は、末吉先生の作品が2つ演奏されました。まず先生の編曲によるセヴラック《休暇の日々から》第1集より〈シューマンへの祈り〉〈教会のスイス人に扮装したトト〉〈公園でのロンド〉〈ロマンティックなワルツ〉を、館野泉先生と平原あゆみさんが3手連弾で演奏。様々に意匠を加えたアンサンブルで、ひとりで弾くよりこの連弾の編曲のほうが、家庭的な暖かい雰囲気を感じられて、より原曲らしい気がしませんか？

締めくくりは、末吉先生作曲の《いっばいのこどもたち》全曲——〈雪とけて〉〈学校へ〉〈えかき歌〉〈遅くなった帰り道〉〈一輪車〉〈太郎を眠らせ〉。もちろん館野先生の演奏です。音の成す様々な緩や形を追いかけていく内に、タイトルにある情景や詩のイメージが様々な浮かび上がってきます。音の楽しさや音の不思議さを改めて思いました。

関連のなさそうの曲目が並んだプログラムでしたが、聴き終わってみると、音や響きの面白さをつくづく感じました。セヴラックの音楽によって、耳が開かれているのかもしれない。

NEWS

●クバイネ氏のインタビューが「音楽の友」2009年5月号に掲載されました

「音楽の友」2009年5月号にクバイネさんの昨年来日時インタビューが掲載されました。
(次ページ参照)

編集後記

- ◆クバイネさんの来日時のインタビューがようやく「音楽の友」誌に掲載されました。誌面の文章以外にも、たくさんのお話をされているので、いずれ機会を見つけて、会報で紹介しようと思います。
- ◆6月13日に八ヶ岳高原音楽堂で館野先生のリサイタルを聴きました。森の中にある六角形の空間で、ステージ後ろや天井のガラス窓から、音楽堂周囲の緑や太陽の光が視界に入ります。風に揺れる木々を眺めながら聴くセヴラックや末吉先生の音楽は素晴らしい体験でした。サン＝フェリクス・ロラゲでのコンサートを思い出しました。

セヴラック通信 第6号 2009 前期 日本セヴラック協会 会報

2009年6月20日発行

発行：日本セヴラック協会

<http://www.geocities.jp/severacjp/index.html>

E-Mail: severac_japon@yahoo.co.jp

名誉会長◎カトリーヌ・ブラック・ベレール

顧問◎館野泉、濱田滋郎、末吉保雄、小沼純一

事務局◎伊東美香、亀田正俊、窪田葉子、松田純子

編集：亀田正俊、窪田葉子、山根京子

事務局：松田純子◎〒247-0013 横浜市栄区上郷町 262-32-5-204 TEL & FAX: 045-895-2317

連絡先：亀田正俊◎ TEL&FAX: 042-502-7227 / E-Mail: kameyan@jcom.home.ne.jp

印刷・製本：フェデックス・キンコーズ・ジャパン

「音楽の友」2009年5月号より

People ~Interviews & Talks~

取材・文＝岸純信
写真＝青柳聡

ジャン＝ジャック・クバイネ

バリトン Jean-Jacques Cubaynes
フランス音楽界の重鎮が語る
セヴラックの世界

近年、特に歌曲で復権著しいデオ
ダ・ド・セヴラック (1872～1
921)。ソプラノの奈良ゆみをはじめ
邦人勢も注目しつつある作曲家だ
が、南仏サン・フェリックス・ロー
ゲで自身の音楽祭を主催するバリト
ンのジャン＝ジャック・クバイネ
に、その音楽の魅力を改めて訊ねて
みた。

「セヴラックはラヴェルと同世代の
人ですが、50年弱の短い生涯でもあ
り、知名度はそれほど高くありません。
でも彼の音楽は郷土色を色濃く打
ち出して面白いですよ。曇り空の多
い北フランスとは対照的な、強い陽
射しを体現する個性、それがセヴラ
ックの音楽です。タンテイ主唱のス
コロ・カントルムで学ぶべく、パリ
で暮らした11年間を除いて、彼はほ
ととどの日々を故郷で過ごしまし
た。

セヴラックの旋律美に漲る息吹と
は、

ピアノ曲にも「ペパーメント・シ
エット」といったワルツの名調子が
ありますが、今は歌曲に話題を集中
しましょう。例えばどレヒツシー風

の繊細な美感を誇る「憂々」や「小
な鳥の唄」があり、一方では温和な
風土に根ざした素朴な響きの「フイ
リス」といった佳曲がありますが、
この2つの個性が並び立つのがセヴ
ラックの独自性なのです。また、初
演者の資質を活かした〈奥たち〉の
ように、男声の低音域を深く掘り下
げるといふ、歌曲には珍しい表現法
も注目されますし、オクシタン (オ
ック語) の詩による歌にもせみ耳を
傾けてみて下さい。同時代の女流詩
人ナヴァールとの共同作業による
〈オバド 朝の歌〉など、オク
シタンのリズムならではの名曲で
す。オック語が「田舎の言葉」では
なく、非常に洗練された言語だと納
得していただけるはずです。トウ
ルーズで歌曲コンクールと講習会を
隔年で開催していますが、日本人の
受講生はみな真面目で、発音もネイ
ティブの水準に極力近づけようと地
道に努力しています。国籍や言語に
こだわらず、自分の音楽性に合う曲
を探し続ける意欲的な世代が、続々
と出てくるよう願っています。



クバイネは昨年「日本セヴラック協会」創立5周年
記念コンサートのために来日、フランス歌曲のほか
オック語の歌曲でも美声を披露した。日本セヴ
ラック協会 <http://www.geocities.jp/severacjp/>



日本セヴラック協会
Société Déodat de Séverac - Japon